

タイトル	2025年度 学校推薦型選抜 共同教育学部 教育人間科学系 教育心理専攻 小論文
評価のポイント	国立教育政策研究所による令和6年度 全国学力・学習状況調査の質問紙調査 https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/report/data/24summary.pdf)の中から「主体的・対話的で深い学び」と「児童生徒の挑戦心・自己有用感・幸福感等」との関係についてその結果を読み取り、これらの結果を実際の教育活動に結びつけて考える問題である(600字)。 評価のポイントは以下の通りである。 1) 問17「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」と問33「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の関連性について最低1つは述べている。 2) 教師として上記の傾向をより望ましい方向に促すための方策について、触れていること。その内容が図の論旨に合っていること。
解答例	図から小学校と中学校で大まかな傾向は一致していることがわかる。その傾向とは、「自分と違う意見について考えるのは楽しい」に当てはまる者は、「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている」にも当てはまる傾向があるということである。どちらが原因かはこの結果からだけでは言えないものの、自分と異なる意見を許容できると、他者との話し合い活動で新たな考えを見だしやすいということである。もちろん、その逆の傾向もあり、他者の意見に不寛容な者は、話し合い活動の意義を見だしづらいことも示す。この傾向は小学校と中学校とを比較すると、中学校になるほど、両者の関連が強まる傾向にある。 ここから、異なる意見への寛容さを学校教育の中で教師として促すことが求められる。これは、他者の意見を論破するような、「論破型」のディベートを授業の中で反面教師にすることが必要だろう。そのためには、他者を排除し、他者よりも優位に立つということを目的とする話し合い活動ではなく、他者とともにウインウインの関係でともに得をするような話し合い活動を、児童生徒に経験させることである。自分と異なる意見からこそ、自分の意見の不備を補う重要な視点があり、それを取り入れることが自分にとって有用であることを、実感させる話し合い活動を教師が担うことが必要である。

(別紙)

タイトル	2025年度 学校推薦型選抜 共同教育学部 教育人間科学系 教育心理専攻 面接問題
評価の ポイント	・志望動機, 教育や心理学に対する興味関心についての質問に対し, 的確に自身の意見が述べられているか。 ・自身の回答に対する面接者からの追加質問に的確に応答できているか。